

## 『障害者にとって、コロナはどんなカゼ???』

2月末から、ヘルパーとの話題はもっぱら、コロナウィルスに関して。訪問するヘルパーは、マスクしてアルコール消毒して介助が始まる。特に夜は、「今日も来ました密集・密接・密閉の時間です」と笑いながら入浴の時間が始まる。でも、「もしかしたら・・・」という危機感がある。障害者もヘルパーも覚悟しての介助現場であり、生活が続いている。

自宅から事業所まで電動車椅子で約15分。その間にある自販機の前で「すみません、缶コーヒーを買って下さい」と通りすがりの人に頼むのが習慣となっていた。顔馴染みになれば軽い世間話が出来たが…いつも通るはずの人が通らなくなった。

4月半ばからは障害者の日中活動が閉所・自粛になり、障害者は自宅待機になった。歩く障害者も、車いすの障害者も見かけなくなった気がする。ピア・エンジンでは、地域に対して啓発することを大切にして活動を進めていこうとしていたが、全く出来ていない状態だ。

障害の種別によって、影響が様々な所で出てきている。知的障害者は人によっては、日中活動が休みになることで生活リズムが崩れ、気持ちがいそぐくなる。視覚障害者は、外出規制などで人に手引きを頼めなくなった。聴覚障害者は、マスク着用で口の動きが分からずコミュニケーションが取りにくくなった。

休校が続いている学校では、オンライン授業を進めようとしている。言葉以外による手段でコミュニケーションをとる障害(児)者はますます取り残されていくんじゃないかと思う。

この秋には第2波、第3波が来る恐れの中で、新しい社会スタイルが求められるが、分断される社会ではないことを望みたい。

障害者は、利用する事業所の人たちとの関係だけではなく、多くの人との関わりによって豊かな生活ができる。

街を歩いていると、「3密」を避けるために、扉や窓を開けている店が多くなっていることに気がつく。これはコロナ予防のための換気だが…。こんなことが障害者－健全者にとって風通しが良くなるきっかけになることを期待する私です。

(文責：下村)



# しょう しゃしせつ ちいきせいかつ どうじしゃなかも 障がい者施設と地域生活している当事者仲間

はげ あ の こ  
“励まし合いながら乗り越えよう！”

ねん がつごろ せかいじゅう もう い ふ はじ しんがた  
2020年1月頃から世界中に猛威を振るい始めた新型コロナウイルス。

がつ にほん かんせんしょうすう にん いじょう しぼうしゃ にん いじょう かがた  
6月までに日本の感染症数が17000人以上にもなり、死亡者は920人以上の方々  
が犠牲になりました。政府も感染拡大防止に乗り出し、4月7日に緊急事態宣言を発令し、  
ふようふきゅう がいしゅつ せいかつ よ こうりてんぼ いんしよくてんぼ ゆうぎしせつとう きゅうぎようようせい  
不要不急の外出規制を呼びかけ、また小売店舗、飲食店舗、遊戯施設等の休業要請  
を行いました。今まで経験したこともない状況が全世界に起こっています。現在、外  
しゅつじしゅく たい でいーぶい ひぼうちゅうしやう えすえめえす か こ ししゅく  
出自粛によってストレスが溜まりDVや誹謗中傷するSNSへの書き込み、「自粛  
ポリス」による「店を閉めろ」などの落書きなどの差別的言動なども発生しています。

ちいき せいかつ どうじしゃなかも がいしゅつじしゅく みつ みつしゅう みつべい みつちやく さ  
地域で生活している当事者仲間も外出自粛や3密「密集」「密閉」「密着」を避けるため  
につちゅうかつどう ば へいしよ じたくたいき よぎ ききてき じやう  
に日中活動の場が閉所されたため、自宅待機を余儀なくされています。この危機的な状  
きやう たいさく じこ たしや まち いみ たいせつ  
況において、こうした対策は、自己や他者を守る意味でも大切なことかもしれません。  
ちいき せいかつ どうじしゃなかも いっしょ か もの い  
しかし地域での生活は、当事者仲間と一緒に買い物をしたり、カラオケに行ったり、おい  
しいものを食べに行ったり、外出による街の人達とふれあうことが醍醐味なのです。今  
しんがた じしゅくせいげん うば ざんねん  
それが新型コロナウイルスによる自粛制限で奪われているのは、残念なことです。

そうちやく じしゅくせいげん ともな へいさてきじやうきやう なか ちてきしやう しゃ おお  
マスクの装着や自粛制限に伴う閉鎖的状況の中で知的障がい者は、大きなストレ  
スカか じしやう たしやうこういとう お  
スを抱えて自傷や他傷行為等を起こやすくなっています。コロナ危機によってテレワー  
くや飲 食の宅配が増えているようですが、自宅にこもる生活が固定化される状況はど  
いんしよく たくはい ふ じたく せいかつ こていか じやうきやう  
うかとお思います。

しょう しゃしせつ かんせんしゃ だ へいさじやうきやう いっそうつよ  
障がい者施設でも感染者を出さないために、閉鎖状況がより一層強まっています。  
しせつにゅうしよしゃ こじんがいしゅつ めんかい ちゅうし すく がいしゅつ きかい うば  
施設入所者は個人外出や面会なども中止され、ただでさえ少ない外出の機会が奪われ、  
そと こうりゅう じやうきやう  
外との交流がほとんどできない状況があります。

ちいき せいかつ どうじしゃ がいしゅつじしゅく いちじてき かいじよ ふだん  
地域で生活する当事者にとって、外出自粛は一時的なもので解除されれば、普段どお  
りの生活に戻ることができます。長年施設で暮らさざるをえない施設入居者とは、全く  
せいかつ もと ながねんしせつ く しせつにゅうきよしゃ まった  
状況が異なります。

このようにコロナ禍が障がい者にもたらす影響は大きく、さらにコロナ後の社会は、障がい者にとってより厳しい社会が予想されます。こうしたなかで、障がい者は健康者を巻き込みながら、これまで築いてきた基盤を守り、より豊かな生活を実現させていかなければなりません。

新型コロナウイルスの一刻も早い完全終息を願い、仲間同士励ましあいながら乗り越えていきましょう。

## “いつもと違う”がしんどい

コロナの影響で、いつもの日常がすべて崩れてしまい、しんどくなっている障害者の方たちがいる。誰だってしんどい状況の中、それぞれ我慢したり、工夫したりと、何とか慣れようと乗り切っているが、障害特性上臨機応変な対応が苦手な障害者がある。

\*バスや電車に乗って外出ができず、家で過ごす時間が長くなった。

\*日中活動がいつもと違う。いつもいる人がいない。

\*みんなマスクを着けていて表情がみえない。などなど。

いつもと違う環境・・・

気持ちの行き場がなくなってしまう、他害やパニックにつながってしまっている。

人への執着が強くなったり、食べ物、飲み物が見えてしまうと、止められなくなってしまうたり、外出したい欲求が増えたり、家を飛び出してしまうたり。そんな中、更に新しいヘルパーさんの研修があったり。

「いつもと違う環境がしんどいねん！」と叫びたい気持ちだと思う。

支援者側としては、原因を追究して、情報を共有して役割分担しながら、統一した対応ができるように日々奮闘している。

早く“いつもと同じ日々”が来て、だれもが安心、安定した暮らしができる事を願っている。





# あなたは知っていますか？

## コロナで命の選別が、始まったことを！



新型コロナウィルスの世界的な大流行で、恐怖と不安でいっぱいの世の中になってしまいました。政府の緊急事態宣言や三密「密閉、密集、密接」を避ける生活は、社会の在り方や文化などを根底から変えて、新しい生活様式や文化を作り直していなければならなくなりました。

こんな非情なコロナウィルスですが、いろんな気付きを人間に与えてくれたと思います。お家時間で外出ができない生活で、時間がたっぷりできたので、これまでできなかったことに取り組んだり、新しい楽しみ方が生まれてきました。そして、何より生きているということや命の大切さを教えてくれたと思います。

コロナ禍の中で、医療関係者や介護従業者の仕事が自ら感染の可能性があるにもかかわらず「いのちを守る仕事」として注目を集めています。普段から社会にとって介護の仕事をもっと重視させていかなければならないと思います。

また、入院ベッドや人口呼吸器等の不足から誰を入院させ、誰に人工呼吸器を装着させるのかの「いのちの選別」が行われ始めています。欧米では既に、心身に障害のある人、持病をかかえている人、高齢者などの救命治療は後回しにされ、死に至っている現状が報じられています。これは、命に優劣をつけてよいという優生思想そのものです。

4年前の2016年7月26日に、相模原市の入所施設「津久井やまゆり園」で起こった、重度障害者が19名も殺害された事件は、命に優劣をつけて、「障害者は生きていても仕方がない」という優生思想によるものでした。このような優生思想が、パンデミックや戦争など社会的な危機状態のなかで顕在化するのではないのでしょうか。

日本には、過去に戦争という名のもとに国民が一丸となって命や生活を捧げてしまった苦い経験があったはずですが、私たちは、どんな非常時や困難な時代でも、生きる権利をすべての人に平等に保障できる社会作りを目指していくべきだと思います。